

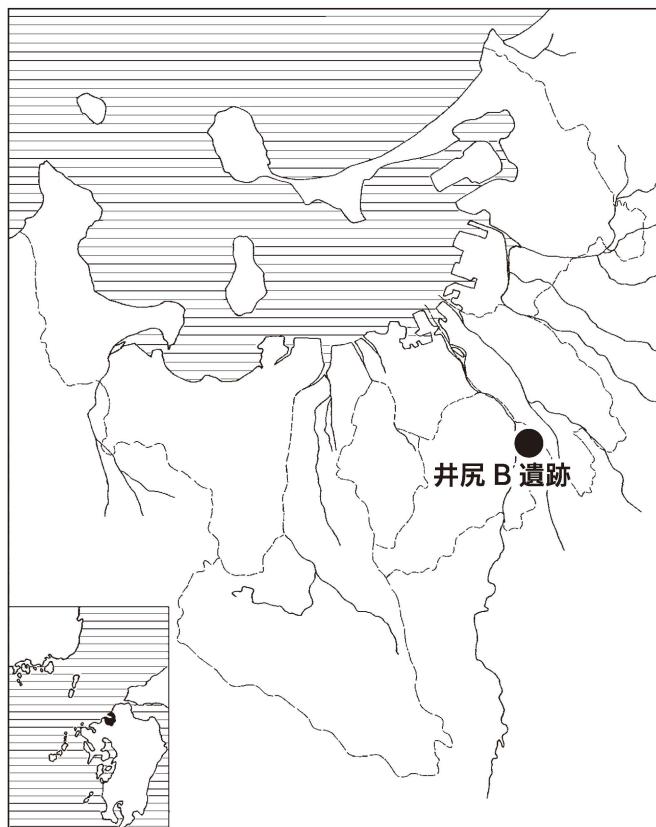
い じり
井 尻 B 遺 跡 22

－第36次調査の報告－

2014
福岡市教育委員会

い じり 井 尻 B 遺 跡 22

－第36次調査の報告－



遺跡略号 IGB-36

調査番号 1112

2014
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書で報告する井尻B遺跡は、福岡平野中央部の中位段丘上に立地する遺跡で、これまでの発掘調査等によって、旧石器から中世の集落址や古墳がみつかっており、福岡平野の重要な遺跡の一つと考えられております。

本書で報告する第36次調査地点は遺跡の北西部に位置しますが、弥生時代から古墳時代前期の大規模な溝の一部などがみつかっており、遺跡の具体的な歴史的変遷を明らかにする資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　言

1. 本書は南区井尻1丁目728-2敷地内の専用住宅建設工事に先立って福岡市教育委員会が実施した井尻B遺跡第36次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は森本幹彦が担当した。遺構の実測と写真撮影、遺物実測は担当者が行い、製図は熊埜御堂和香子（技能員）が行った。
3. 土壤の科学的分析（花粉分析）と報告（第III-3章）を株式会社古環境研究所に委託した。
4. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。
5. 遺構の略号は、溝をSD、柱穴をSP、その他をSXとしている。
6. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は平成26年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

井尻B遺跡第36次調査		遺跡調査番号	1112
地番	福岡市南区井尻1丁目728-2	遺跡略号	IGB-36
分布地図番号	O24板付	調査面積	175 m ²
調査期間	2011(平成23)年7月1日～8月19日		

本文 目次

I.	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	位置と環境	2
III.	第36次調査の報告	3
1.	調査の概要	3
2.	調査の記録	3
1) 遺構		3
2) 出土遺物		8
3.	井尻B遺跡第36次調査における花粉分析	17
4.	まとめ	24

挿図目次

Fig. 1	井尻B遺跡周辺 (1/40000)	2
Fig. 2	井尻B遺跡 (1/7500)	3
Fig. 3	第36次調査地点周辺 (1/400)	4
Fig. 4	第36次調査区全体図 (1/100)	5
Fig. 5	SX007実測図 (1/40)	6
Fig. 6	SD002土層実測図 (1/40)	6
Fig. 7	基本土層、SD001・005周辺土層実測図 (1/60)	7
Fig. 8	SD001出土土器実測図1 (1/3)	9
Fig. 9	SD001出土土器実測図2 (1/3)	10
Fig. 10	SD001出土土器実測図3 (1/3)	11
Fig. 11	SD001出土土器実測図4 (1/3)	12
Fig. 12	SD001、SD005出土土器実測図5 (1/3)	13
Fig. 13	土製品、石製品実測図 (1/2)	14

図版目次

PL. 1	1. I区全景 (SD001上層掘削段階 北から)	25
	2. I区 SD001周辺 (南から)	25
PL. 2	1. I区 SD001南壁土層断面	26
	2. I区 SD005 (北から)	26
PL. 3	1. II区作業風景 (南から)	27
	2. II区全景 (南から)	27
PL. 4	1. II区 SD002 (南から)	28
	2. III区全景 (SD001上層掘削段階 南から)	28
PL. 5	1. III区全景 (北から)	29
	2. III区 SD001 (南から)	29
PL. 6	出土遺物	30

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

2010（平成 22）年 11 月 10 日付けで個人事業者より福岡市教育委員会宛に、南区井尻 1 丁目 728-2（敷地面積 319.93 m²）における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会がなされた（事前審査番号 22-2-785）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻 B 遺跡内であり、2010 年 12 月 21 日に埋蔵文化財第 1 課事前審査係で試掘調査したところ GL-100 cm 以下の深さで 17 次調査 F 区検出溝の延長等の遺構や遺物の存在が確認された。この成果をもとに協議を進めたが、建設工事にあたっては地盤改良工事等が必要で遺構の破壊を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査対象は建設工事範囲の 187.73 m²で、実際の調査面積は 175 m²である。調査・整理費用には国庫補助金が適用された。2011 年の 7 月 1 日から 8 月 19 日まで発掘調査を実施した。整理作業は平成 25 年度を行った。

2. 調査の組織

調査委託 個人事業者

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

平成 23 年度

調査総括 文化財部長 藤尾浩

文化財部埋蔵文化財第 2 課課長 田中壽夫

埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係長 菅波正人

庶務担当 埋蔵文化財第 1 課 管理係 井上幸江

事前協議 埋蔵文化財第 1 課事前審査係長 宮井善朗

事前審査係 木下博文

調査担当 埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係 森本幹彦

なお文化財部は組織改編のため平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局に移管しており、整理・報告を実施した平成 25 年度の調査の組織は以下の通りとなっている。

調査総括 文化財部長 西島裕二

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課調査第 2 係長 榎本義嗣

庶務担当 埋蔵文化財審査課 管理係 横田忍

報告担当 埋蔵文化財審査課 事前審査係 森本幹彦

II. 位置と環境

井尻 B 遺跡群は福岡平野の那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する。

この台地は阿蘇山の火碎流の二次的堆積物からなる中位段丘で、春日丘陵から北方に井尻、五十川、麦野、板付、諸岡、那珂、比恵と断続的に分布しており、それぞれに遺跡が立地している。

弥生時代から古墳時代では、板付遺跡、比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群などが福岡平野の代表的な遺跡として知られるが、井尻 B 遺跡はそれらの中間的な位置にある。

遺跡は南北 900m、東西 400m ほどの範囲で、中央に「井尻廃寺」の推定域がある。

平成 25 年までで 40 次の調査が行われている。遺跡北部の御供所・井尻線（都市計画道路）の発掘調査や、遺跡南部の西鉄井尻駅より南に伸びる通り沿いにおける共同住宅や店舗建設に伴う発掘調査が多く、それらのエリアでは比較的詳細に遺跡の内容が明らかになってきている。

旧石器時代～中世の遺跡がみつかっているが、旧石器時代の包含層、弥生時代中期の甕棺墓群、弥生時代中期～古墳時代前期の集落（特に弥生後期から古墳時代前期前半にピークがあり、青銅器生産関係遺物や外来系土器等も一定量出土）、弥生時代終末期の区画墳丘墓、古墳時代中期の古墳群（家形埴輪等が出土）、飛鳥時代から奈良時代の官衙・寺院関連遺構（「寺」刻書土器、「山部評 豊評」刻書瓦等出土）などが、これまでの発掘調査における主要な成果となっている。

本書で報告する第 36 次調査地点は遺跡の北部に位置するが、周辺は御供所・井尻線の調査（第 17 次調査）等で近年、大規模に発掘調査が行われているエリアである（Fig. 3・4）。本調査地点や 17 次調査 F 区では弥生時代後期から古墳時代前期の大溝がみつかっており、17 次 E 区以南では当該期の竪穴建物や掘立柱建物ほか集落関連遺構がみつかっている。

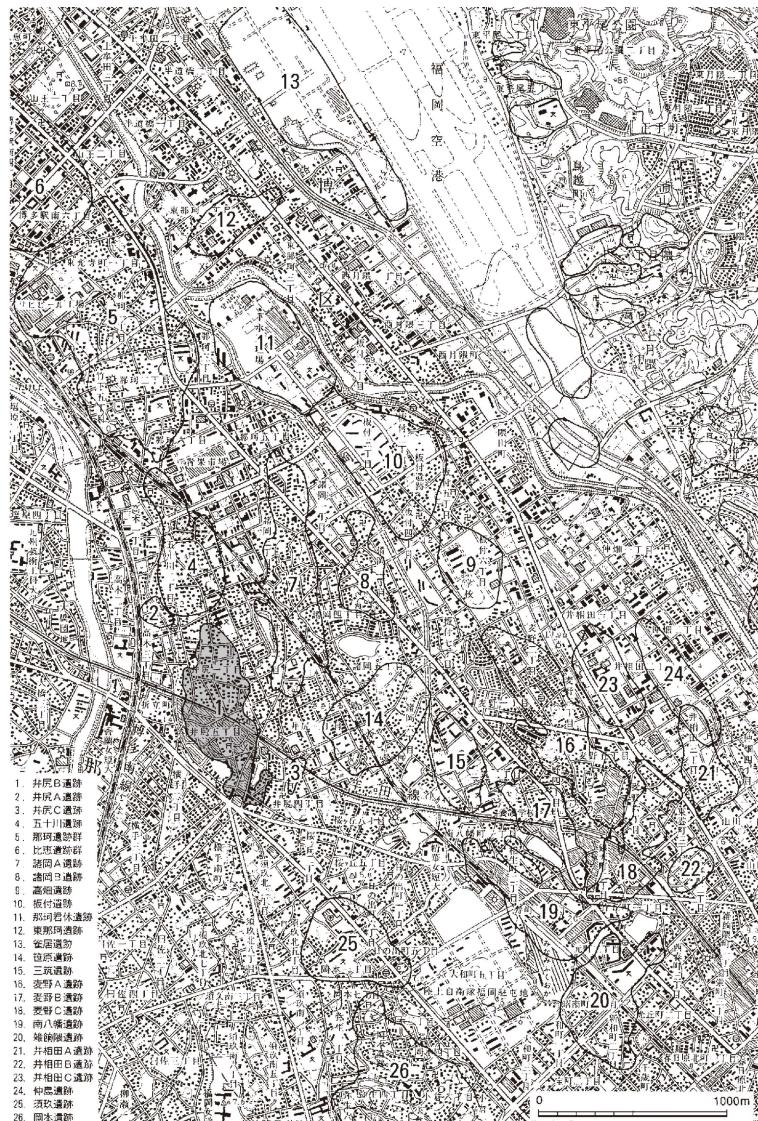


Fig.1 井尻 B 遺跡周辺 (1/40000)

III. 第36次調査の報告

1. 調査の概要

本調査地点は井尻 B 遺跡の北西縁辺部である。宅地盛土と旧水田耕作土下、GL-90 ~ 100cm 前後で遺構面となる。遺構面は調査区東部が鳥栖ローム、西部はその上層の黒ボク土である。標高は 10.9 ~ 11.1m 前後で東から西、南から北に向かってゆるやかに低くなる地形である。

検出した遺構は弥生時代から古墳時代の溝 3 条以上である。幅 6m、深さ 1.5m 前後の大溝があり、17 次 F 区 SD2005 等の延長とみられる。

調査グリッドは敷地の形状に合わせて任意の方向で設定したが、国土座標に近似している。敷地内で廃土を処理する必要があり、対象地を南から 3 区に分けて調査を行ったが、対象地の大部分を大溝が占めるため、十分な廃土置き場を確保するのが困難であった。安全を確保するためにも、大溝の半分近くは下層の砂層検出面で掘削を停止している。

出土遺物はコンテナケース約 20 箱である。弥生時代から古墳時代の土器が主体である。他には鋳型内型の可能性がある土製品、磁石、黒曜石剥片などが出土している。

2. 調査の記録

1) 遺構 (Fig.4 ~ 7)

① SD001

箱掘りで幅 6m、深さ 1.5m 前後を測る南北方向の溝で、南北長 12.3m を検出した。土層断面や掘り方から少なくとも 1 回は再掘削がなされている。

SD001 西側は C ライン周辺で段があり、Fig7-C の 8 ~ 23 層については再掘削後の堆積と

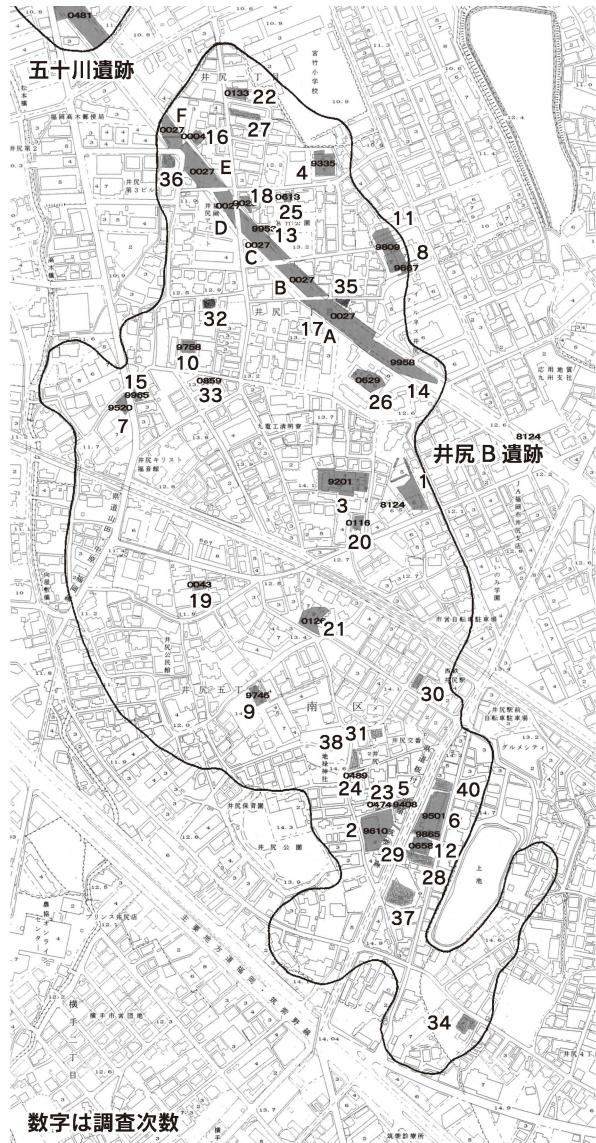


Fig.2 井尻 B 遺跡 (1/7500)

みられる。24・25 層の灰色粘質土層はこれに切られているとみることができよう。B ラインの 3～24 層、A ラインの 6～16 層がこれに対応するとみられる。当初のものを SD001a、再掘削後を SD001 b とする。

また、B ライン周辺の SD001 東部では SD001 b に切られる溝も確認できる（30、31 層）。SD001 c としたい。SD001a との前後関係は不明確であるが、A ラインでその断面が確認できないので、SD001a より古いとみられる。SD001 c の東壁は SD001a、b のそれとほぼ重複しており、SD001 c の下層のみが埋没した段階で SD001a、b が掘削されたものとみるこ



Fig.3 第36次調査地点周辺 (1/400)

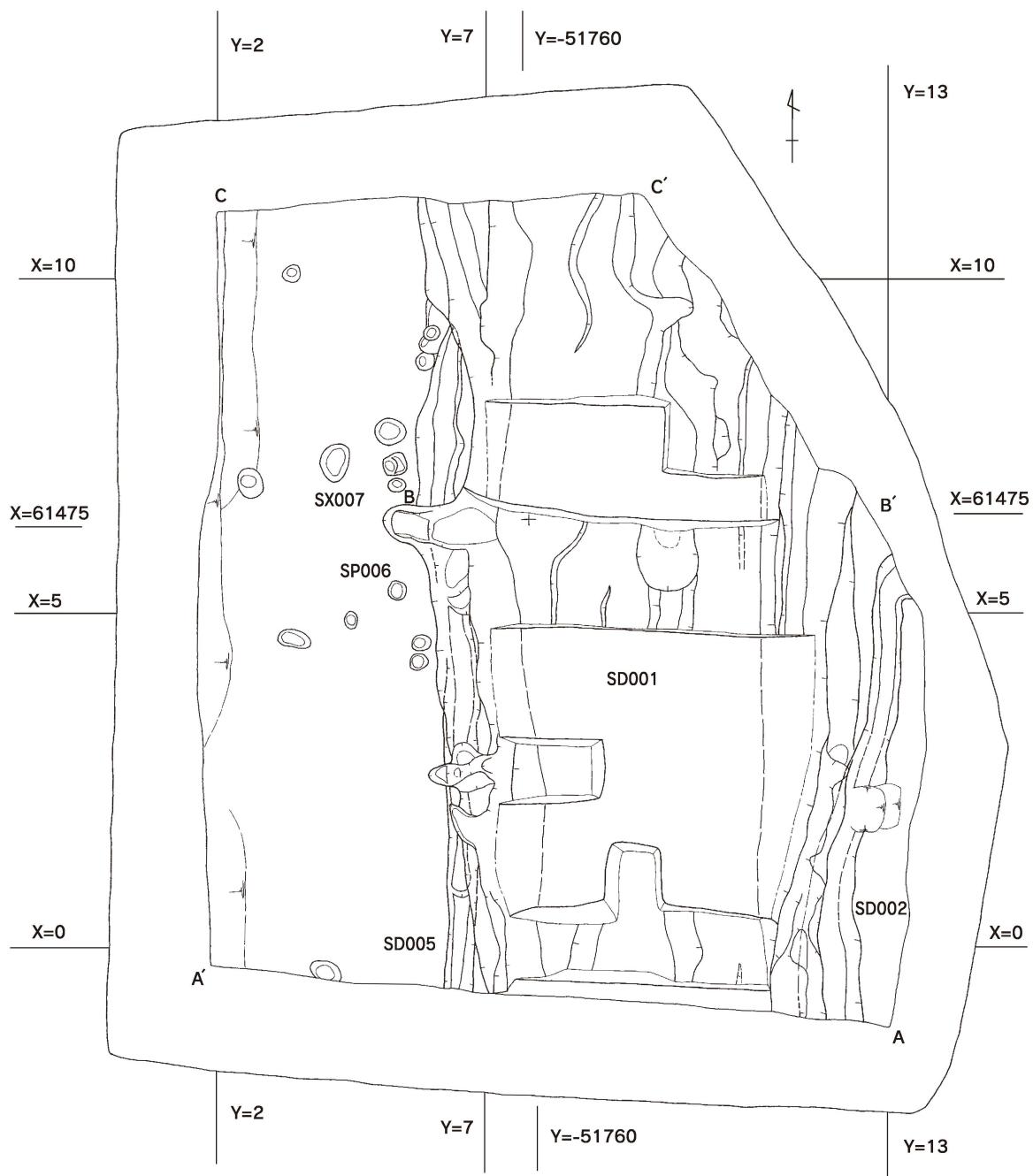


Fig.4 第36次調査区全体図 (1/100)

とができる。

SD001 の西肩には溝に直交する方向の掘り込みがあるが (SX007 等、Fig.5)、水口のようなものなのか、その性格については不明確である。

調査時に「SD001 上層」としたものは暗褐色シルト主体の堆積層で、滯水状態の自然堆積とみられる。SD001 b の上～中層に対応する。SD001 下層は粗砂層を主体とする堆積で流水機能時の自然堆積とみられる。SD001 b の下層と SD001 a の堆積に対応するが、灰色粘質土層の堆積状況 (A ラインの 15・16 層、B ラインの 20・21・23・24 層、C ラインの 24・25 層) で SD001a と b の線引きができる。

下層の砂層まで掘削すると、常時湧水がある状況で、SD001a の掘り方は八女粘土層に達している。水源として西側の旧河道か溜め井のようなものがあったのか定かではないが、湧水も多く、水量豊富な水路として機能していたものとみられる。

SD001a 溝底の標高は A ライン 9.5～9.8m、B ライン 9.4～9.7m である。C ラインは 9.6m 以下であるが、東側調査区外で、一段深くなるとみられる。SD001b は A ライン 10.1～10.2m、B ライン 9.9～10.1m、C ライン 10.2m である。溝底の両壁寄りが中央より深くなる。SD001a の溝底は北に向かって 10m 每 14cm 前後低くなっていく計算になるが、SD001b はほとんど傾斜がないようである。

SD001c は断面 U 字形で、溝底は標高 10.2m 前後で、SD005 よりは 30cm 深いが、同時に並列する溝として機能していた可能性はある。覆土は黒灰色粘質土の下層に薄い砂層の堆積がある。

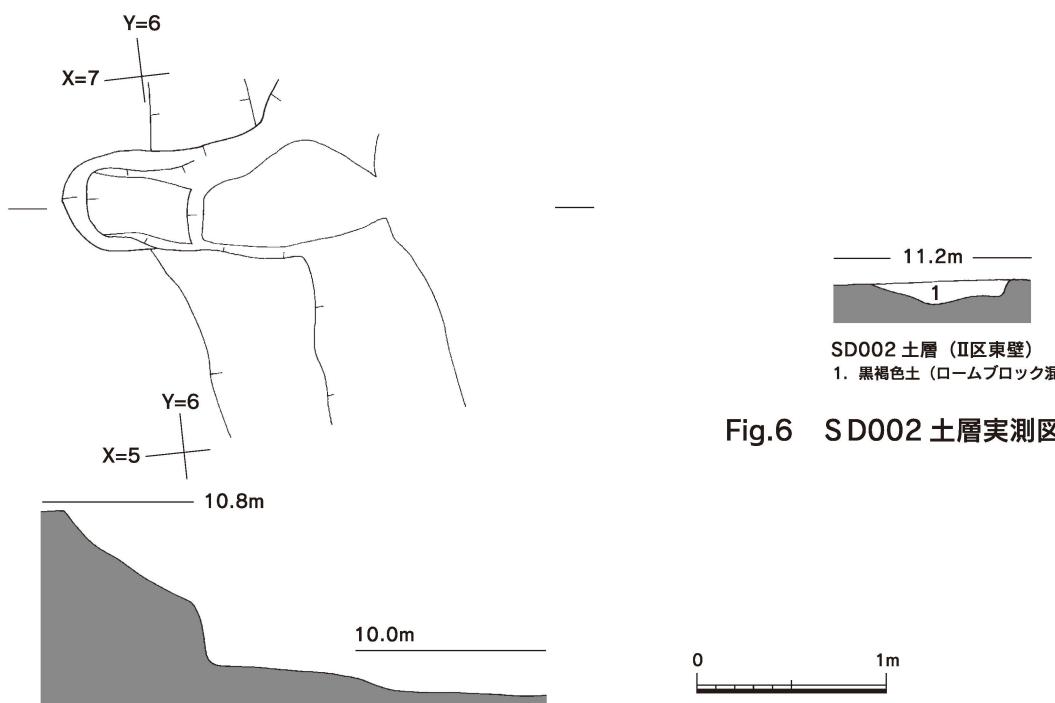
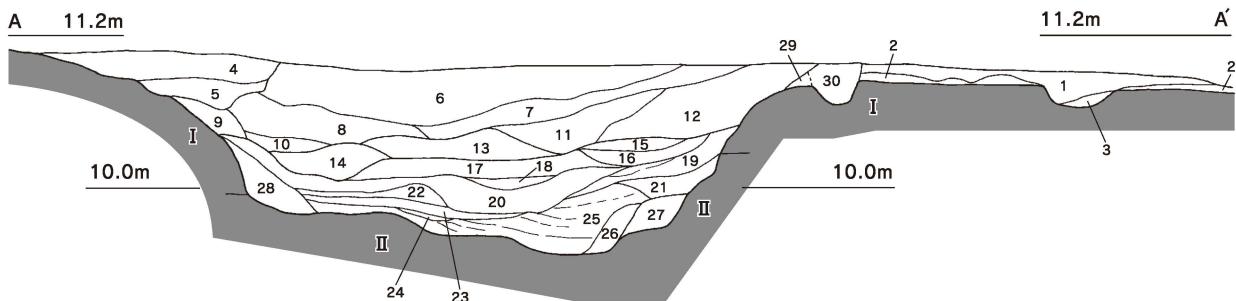
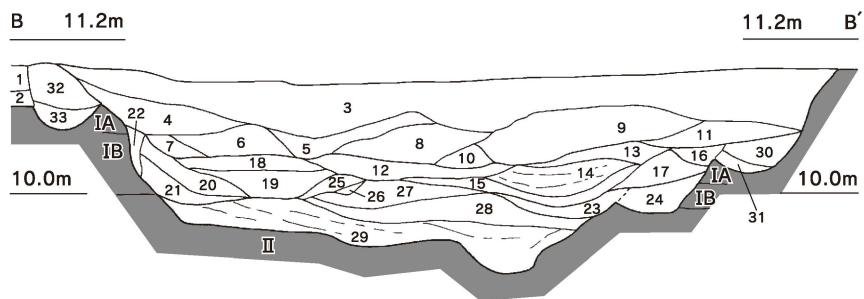


Fig.5 SX007 実測図 (1/40)



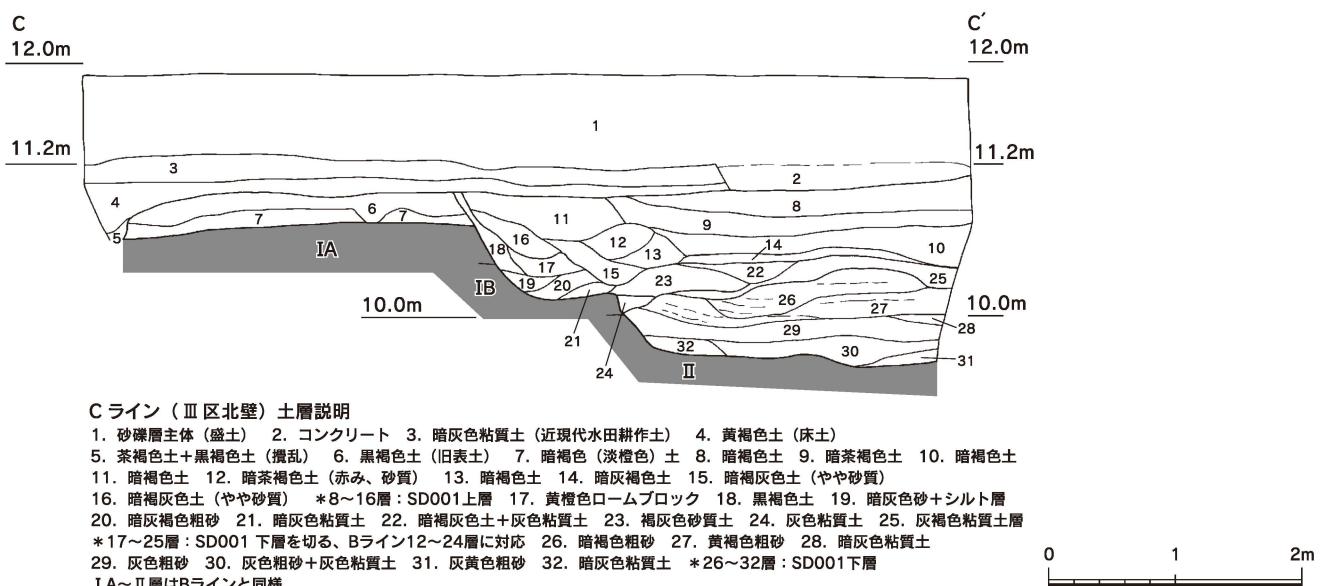
A ライン (I 区南壁) 土層説明

- 1. 黒褐色土：旧表土 2. 暗茶褐色土：漸移層 3. 茶褐色土 4. 暗褐色土（黒み） 5. 黒褐色土（やや砂質）
- *4・5層：SD002 6. 茶褐色土 7. 6層より明るく砂質 8. 暗茶褐色土（黒み） 9. 暗茶褐色土 10. 黒褐色砂質土
- 11. 暗褐色土 12. 黒褐色土（茶褐色土混） *6～12層SD001上層 13. 暗褐色砂質土 14. 灰褐色砂+黒褐色シルト
- *13・14層：上層下位 15. 暗黄褐色粘質土 16. 灰褐色粘質土 17. 暗灰褐色粗砂 18. 黑灰色砂
- 19. 黑褐色土+灰色粘質土 20. 明褐色粗砂 21. 暗灰色粘質土 22. 灰色粗砂+粘質土 23. 暗灰色粘質土
- 24. 灰白色粘質土ブロック 25. 灰色粗砂 26. 暗灰色粘質土+砂混 27. 黄褐色土+茶褐色土 28. 暗灰色粘質土
- *15～28層：SD001下層 29. 黑褐色土+茶褐色土 30. 黑褐色土：SD005 I. 暗橙褐色ローム層（地山）
- II. 黄褐色粘質土



B ライン (II 区北壁) 土層説明

- 1. 黒褐色土 2. 明褐色土 3. 茶褐色土 4. 黒褐色土 5. 暗褐色土（やや砂質で黒み） 6. 褐灰色砂質土
- 7. 暗灰褐色土 8. 褐灰色砂質土 9. 暗褐色土（黒み） 10. 灰色砂+黒褐色土+地山小ブロック 11. 暗褐色砂質土
- 12. 暗灰色砂質土 13. 灰色粘質土 14. 灰色粗砂主体 15. 黄褐色粗砂主体 16. 暗灰色粘質土+ロームブロック
- 17. 灰褐色粘質土 18. 灰褐色粘質土主体 19. 褐灰色粗砂主体 20. 灰色粘質土 21. 暗灰色粘質土
- 22. 暗褐色土（根攢乱） 23. 暗灰色粘質土 24. 灰色粘質土 25. 灰色細砂 26. 灰色粗砂 27. 暗灰色粗砂
- 28. 灰色粗砂主体 29. 暗灰黄色粗砂 30. 黑灰色粘質土 31. 灰褐色砂質土 32. 黑褐色土
- 33. 黑褐色土（ローム混） *32・33層：SD005 IA. 赤褐色ローム IB. 明褐色（淡橙色）粘質土 II. 黄色粘質土



C ライン (III 区北壁) 土層説明

- 1. 砂礫層主体（盛土） 2. コンクリート 3. 暗灰色粘質土（近現代水田耕作土） 4. 黄褐色土（底土）
- 5. 茶褐色土+黒褐色土（攢乱） 6. 黒褐色土（旧表土） 7. 暗褐色（淡橙色）土 8. 暗褐色土 9. 暗茶褐色土 10. 暗褐色土
- 11. 暗褐色土 12. 暗茶褐色土（赤み、砂質） 13. 暗褐色土 14. 暗灰褐色土 15. 暗褐色砂質土（やや砂質）
- 16. 暗褐色土（やや砂質） *8～16層：SD001上層 17. 黄褐色ロームブロック 18. 黑褐色土 19. 暗灰色砂+シルト層
- 20. 暗灰褐色粗砂 21. 暗灰色粘質土 22. 暗褐色土+灰色粘質土 23. 灰褐色砂質土 24. 灰色粘質土 25. 灰褐色粘質土層
- *17～25層：SD001下層を切る、Bライン12～24層に対応 26. 暗褐色粗砂 27. 黄褐色粗砂 28. 暗灰色粘質土
- 29. 灰色粗砂 30. 灰色粗砂+灰色粘質土 31. 灰黄色粗砂 32. 暗灰色粘質土 *26～32層：SD001下層
- IA～II層はBラインと同様

Fig.7 基本土層、SD001・005周辺土層実測図 (1/60)

②SD002

SD001 の東側を切る南北方向の溝で、幅 50 ~ 90cm、深さ 15 ~ 40cm 前後的小溝である。北側の調査区壁面近くで東に屈曲している。(Fig.6) 溝底は北側が高く、標高 10.95m、南側が 10.6m となる。覆土は黒褐色土や黒みのある暗褐色シルトが主体である (Fig.7 の A ライン 4・5 層)。

③SD005

SD001 の西側と重複する南北方向の溝で、SD005 が先行する。SD001c と同時期に並列していた可能性がある。幅 50cm 前後、深さ 30 ~ 50cm の小溝である。覆土は黒褐色シルトを主体とする。

2) 出土遺物 (Fig.8 ~ 13)

SD001 出土の弥生土器・土師器が出土遺物の主体をなす。

Fig.8 ~ 9 は SD001 上層出土土器。

1 は近畿系の直口広口壺。底部は丸底で、古墳時代初頭である。胴部外面は縦ハケ主体、内面ケズリの上端は中位よりやや上で、肩付近はハケと粘土継目を残す。「V 様式」系。II 区上層下位～下層上部出土であるが、西側の遺構面から出土した破片とも接合。

2 は西新式系の壺で、口縁を欠くが複合口縁であったろう。底部は丸底で古墳時代初頭。胴部外面上位に横 S 字状のヘラ描記号文がある。焼成破裂痕あり。II 区上層出土、取り上げ番号 R3。

3 は西新式系小型直口壺。弥生終末後半から古墳時代初頭頃。II 区上層下部出土。

4 は弥生後期の複合口縁壺。II 区上層下部出土。5 は鋤先口縁壺の系譜を引く大型壺で糸島系か。口縁端面に列点文を施すが、遺存不良。III 区上層下部出土。6 は古墳時代初頭の複合口縁壺と判断したが、弥生後期の高杯の可能性もある。7 はく字口縁鉢。弥生後期前半。III 区上層下部出土。8 は甕の脚台とみられる。二次的被熱や煤酸化を経ている。II 区上層下部出土。9 は西新式系の器台で、弥生終末から古墳前期。I 区上層出土。

Fig.9-1 は西新式系の大型甕（甕棺サイズ）。古墳初頭か。III 区上層下部～下層上部出土。2 は大型壺の頸部で外面に丹塗り痕跡がある。弥生時代中期後半から後期初頭か。3 ~ 7 は III 区上層下部出土の土器底部である。3 は弥生後期初頭の大型甕、4 は後期前半の壺、5 は弥生終末期の大型甕、6 は同時期の甕、7 は同時期の壺である。8 は II 区上層下部出土で、古墳時代初頭の大型甕である。

9 は近畿 V 様式系の甕である。小さい不安定な平底で古墳初頭前後の型式である。胴部は右上主体の平行タタキで、下部はタテハケによってタタキ目を消している。内面は胴下部が簾状ハケメ等、上部はナデである。頸部周辺にハケメを残し、口縁部付近の調整はケズリに近い。胴下部の内外面にみられる粘土継目は成形の単位を示す。赤褐色の色調で角閃石、雲母を多く含むが、在地の胎土の範疇に入る。煮沸等の使用痕がほとんどみられない。I 区の下層上面出土、取り上げ番号 R1。

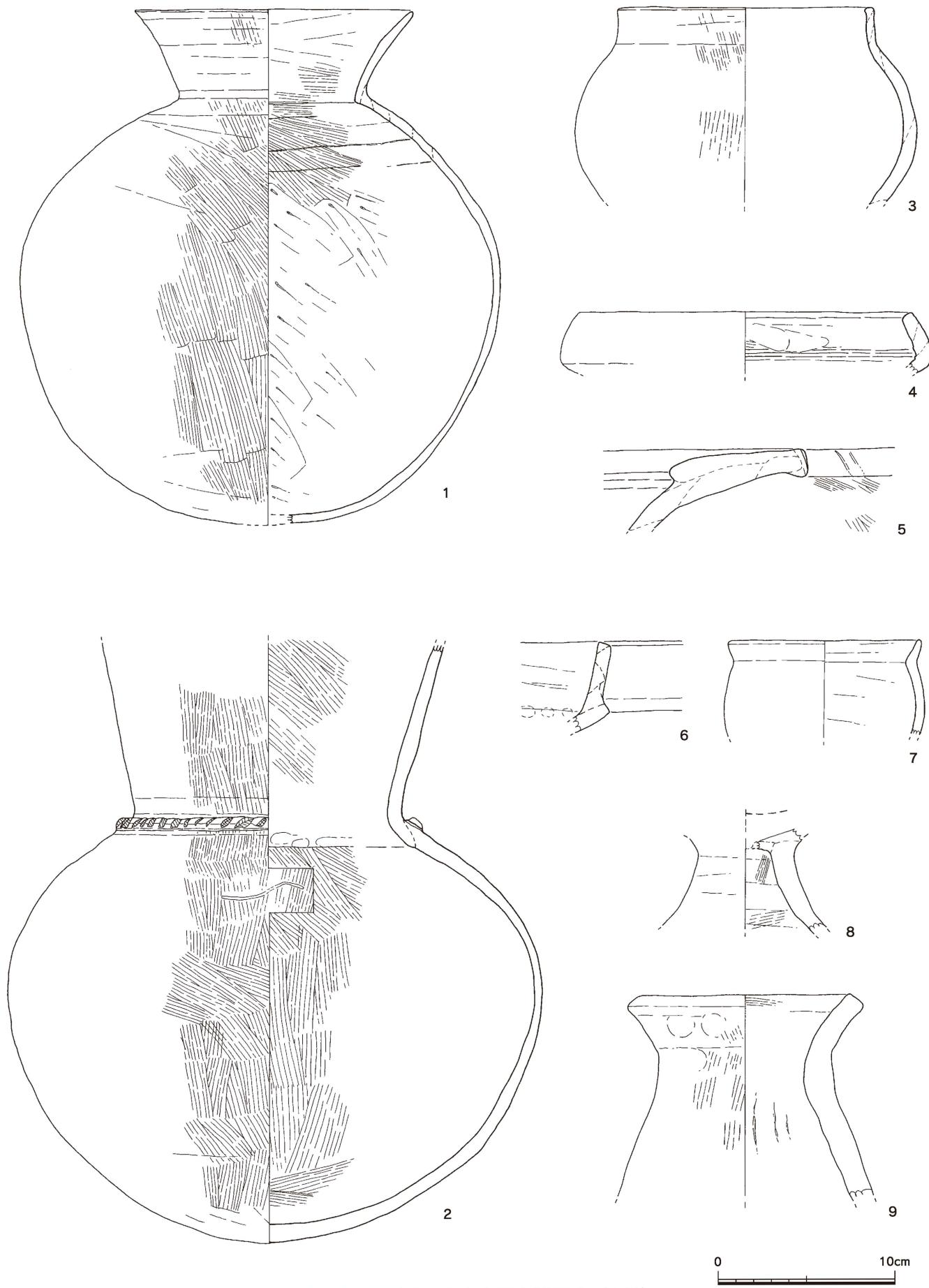


Fig.8 SD001 出土土器実測図 1 (1/3)

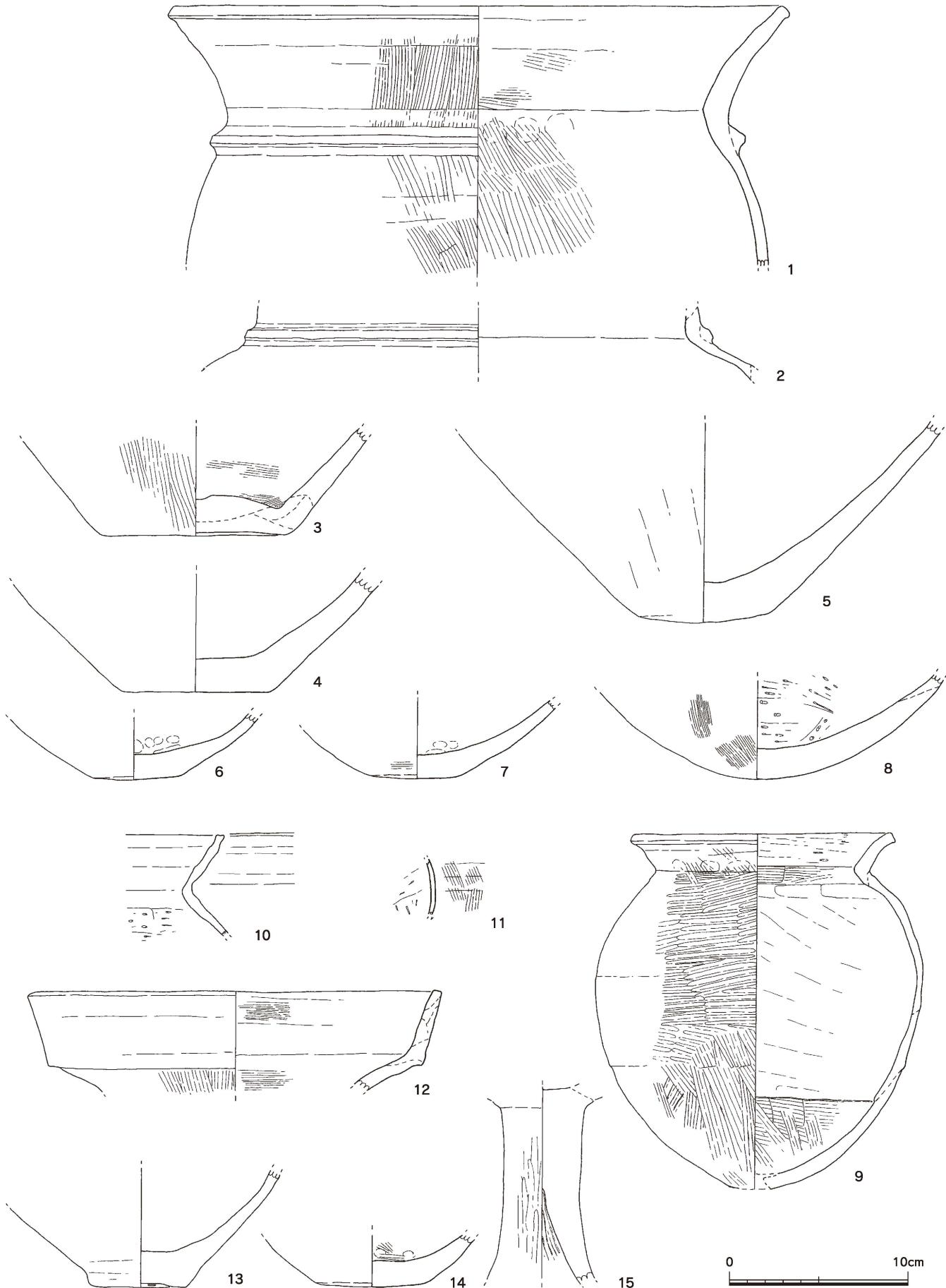


Fig.9 SD001 出土土器実測図 2 (1/3)

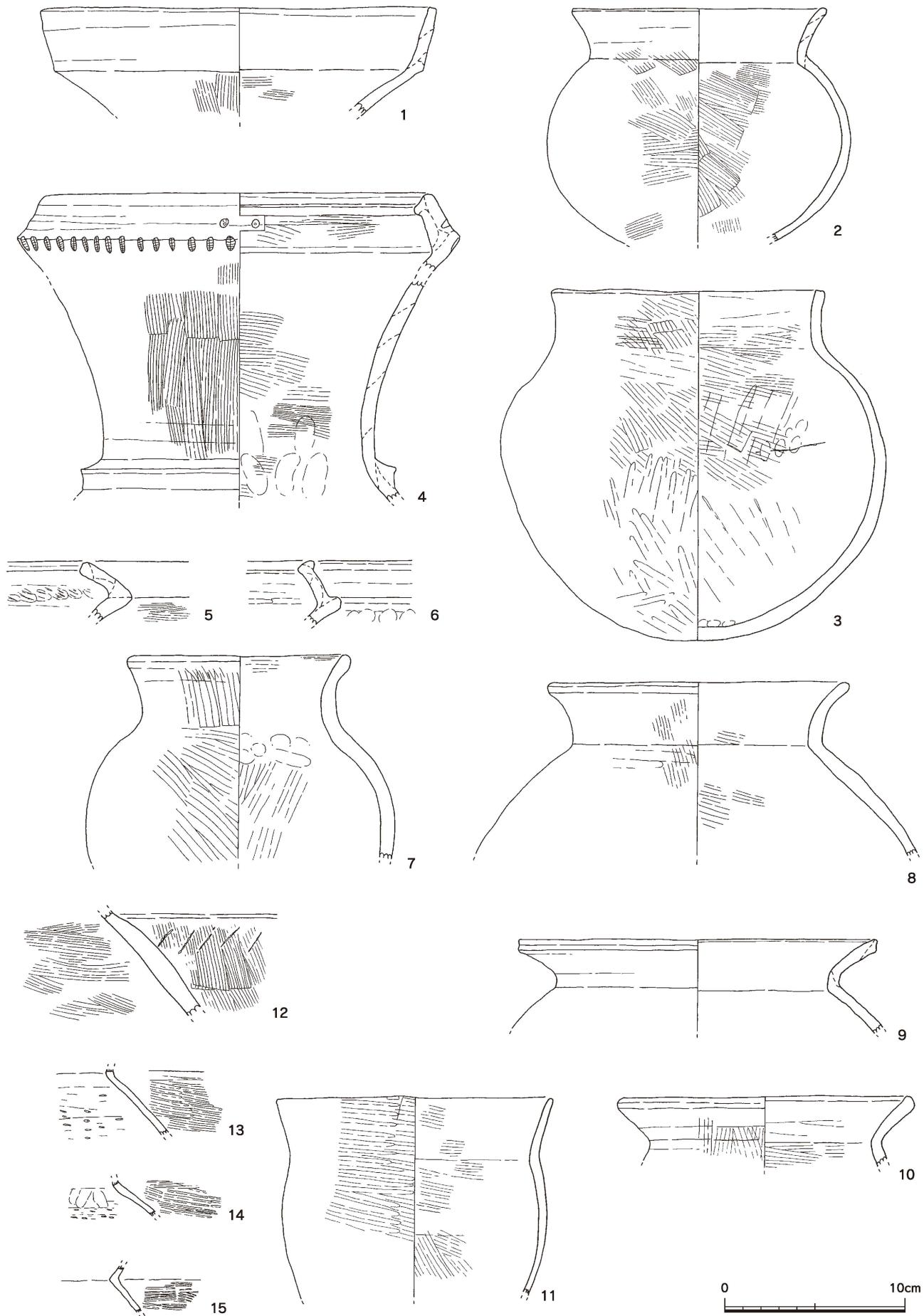


Fig.10 SD001 出土土器実測図 3 (1/3)

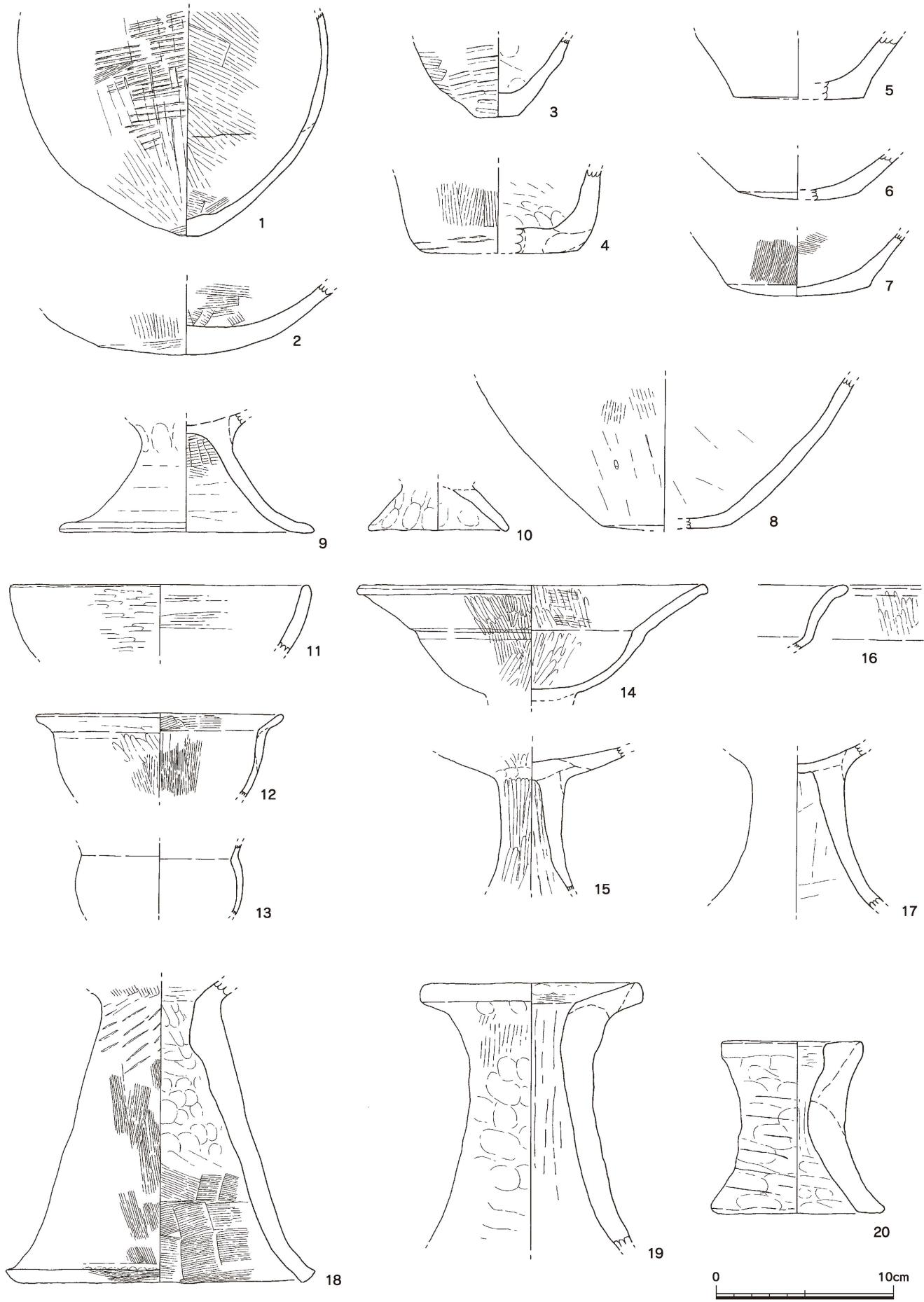


Fig.11 SD001 出土土器実測図 4 (1/3)

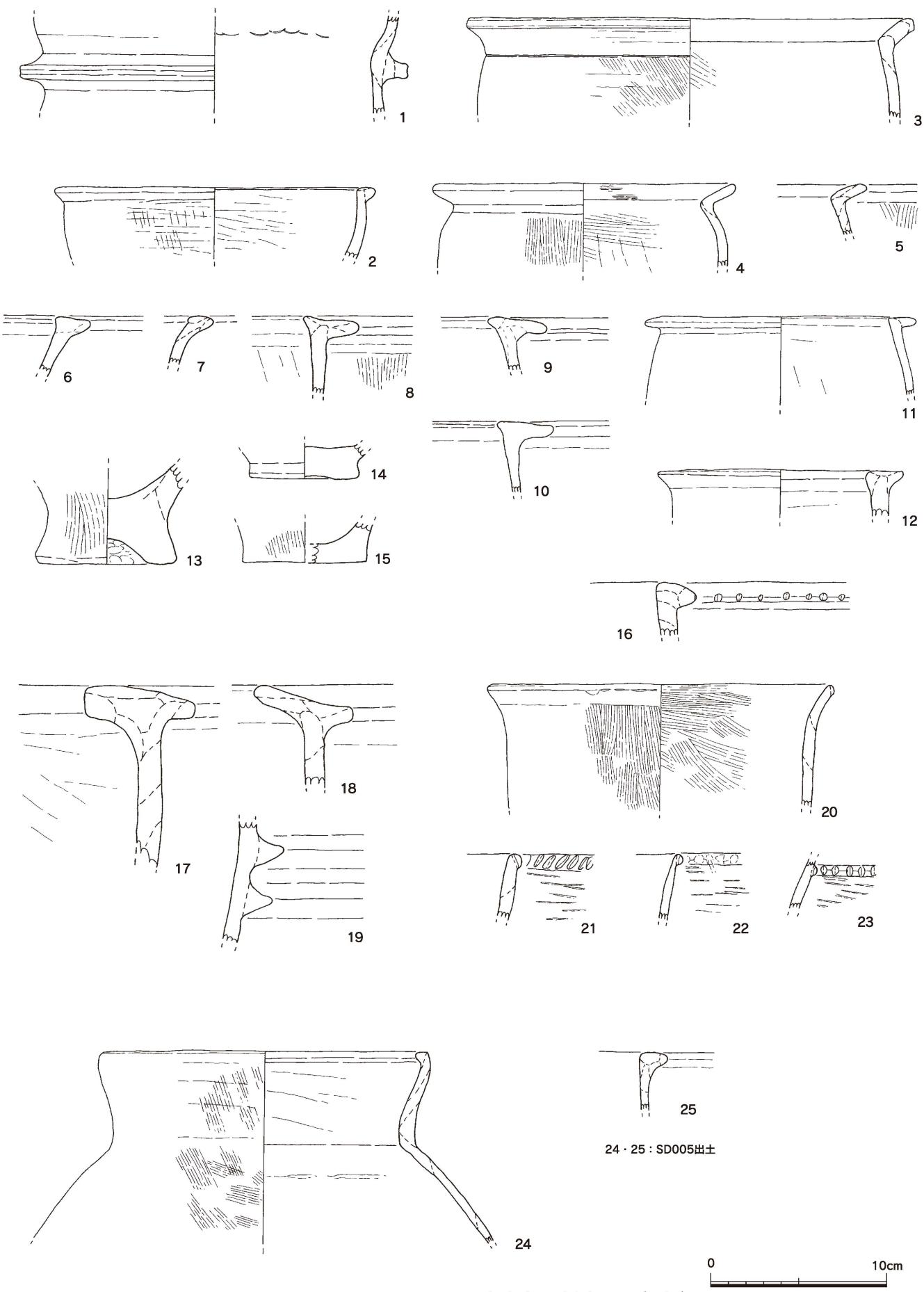


Fig.12 SD001、SD005 出土土器実測図 5 (1/3)

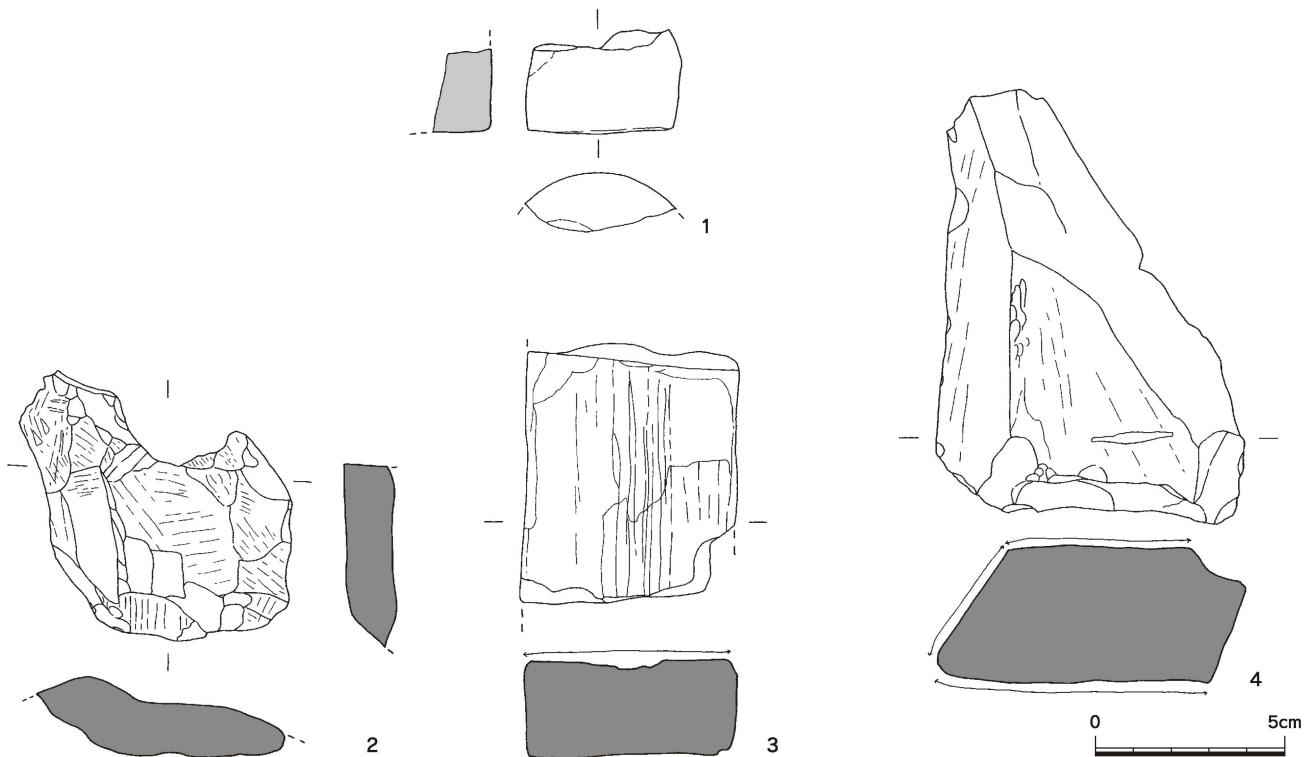


Fig.13 土製品、石製品実測図 (1/2)

10、11 は I 区上層下部出土の布留式系甕の小片である。前者は口頸部の形態から古墳前期前半とみられる。後者は胴部片で傾き等不明である。

12 は在地系の複合口縁壺で、近畿系二重口縁壺の影響を受けた古墳前期のものであろう。I 区上層下部出土。13・14 は I 区上層下部出土壺底部である。前者は弥生中期末～後期初頭、後者は後期後半である。15 は高杯脚部で上部は中実である。古墳初頭前後の近畿 V 様式系の影響を受けたものか。I 区上層下部出土。

Fig.10～11 は SD001 下層出土土器である。

1 は Fig.9-12 と同様の複合口縁壺。I 区出土。2 は古墳初頭前後の西新式系小型直口広口壺。赤褐色で砂粒の少ない比較的精良な胎土である。II 区下層上位出土。

3 も古墳時代初頭前後の西新式系小型壺である。外面はハケメ主体であるが、胴下半はミガキで、口頸部にタタキ痕跡がある。内面は下半がケズリ状のナデ、上半以上がハケメ主体で、口縁部付近は横ナデで消す。胴中位に粘土継目があり、器面調整の変換点もその辺りにあるので、成形の単位を示すものであろう。III 区東部出土。

4 は複合口縁壺で、口頸部の稜線に板状工具小口（ハケメ工具）を押し当てた列点文、口縁中ほどに貫通しない穿孔がある。弥生終末期。III 区下層中位～下位出土。5 は後期の複合口縁壺で、II 区下層下位出土。6 は終末期の複合口縁壺で豊前系か。弥生終末期とみられる。I 区下層出土。

7 は後期の広口直口壺である。III 区最下層出土、取り上げ番号 R4。

8 は後期から終末期の広口壺でⅢ区下層中位出土。9 は後期の甕でⅡ区下層下位出土。10 は終末期前後の小型甕で跳ね上げ気味の口縁である。Ⅱ区下層上位出土。11 は古墳初頭前後の西新式系小型甕でⅠ区下層上位出土。12 は壺の肩部で外面に貝殻腹縁の列点文がある。調整、胎土等から後期～終末期の在地のものとみられる。Ⅰ区出土。

13～15 はⅢ区下層上～中位出土の庄内甕である。いずれも頸部付近の小片である。13・14 は外面やや太筋の左上タタキ、頸部内面にシャープな稜線はなく、ケズリの上端が頸部より少し下り、淡褐色（白み）の色調を呈する「筑前型」である。15 は外面やや細筋のタタキで頸部内面に稜線があり、赤褐色を呈する。河内型の影響を受けたものか。

Fig.11-1 は近畿V様式系甕の胴部である。小さい不安定な平底で古墳初頭前後の型式である。外面右上主体のタタキで、下半を中心力カキナデが施され、内面はハケメ主体である。淡赤褐色を呈し、使用痕はほとんどみられない。Ⅲ区下層上位出土。

2 は終末期後半の壺底部である。内面の一部に簾状ハケメがみられる。3 は平底の鉢または小型甕で、弥生後期のものとみられる。Ⅲ区下層中位出土。4 は後期前半の甕また鉢底部で、Ⅰ区南出土。5・6 はⅠ区出土の壺底部で前者は後期前半、後者は終末期である。7 はⅡ区下層上位出土の甕底部で後期末か。8 はⅢ区下層下位出土の甕底部で終末期である。外面下半はカキナデである。9 は脚台であるが、壺・鉢か甕のものか不明。Ⅲ区出土。10 は手捏ねの脚台である。製塙土器の可能性がある。橙褐色を呈するが、二次被熱かどうかは不明。Ⅱ区下層下位出土。11 は後期の直口鉢でⅢ区出土。12 はく字口縁鉢でⅢ区出土。13 は古墳初頭の小型丸底壺であるが、砂粒を多く含む胎土である。調整は不明。Ⅰ区西出土。14 は小型の高杯で西新式系をベースとするが、近畿系の影響を受けている可能性がある。古墳初頭とみられる。Ⅲ区下層中位出土。15 は西新式系高杯脚部でⅢ区下層中位出土。16 は後期後半の高杯で、Ⅰ区出土。17 は後期前半の高杯脚部でⅡ区下層上位出土。18～20 は後期の器台・支脚である。18 はⅡ区下層上位、19 はⅢ区、20 はⅢ区下層中位出土。

Fig.12 の 1～23 は SD001 出土の弥生中期以前の土器で混入とみられる。

1 は瓢形壺の結合部付近で外面丹塗。同一個体とみられる鋤先口縁や頸部片もある。中期後半。Ⅰ～Ⅱ区上層出土。2 は中期初頭の鉢でⅡ区下層下位出土。3 は中期前半の屈曲口縁甕で、Ⅰ区出土。外面下の沈線状はナデ工具の端が深く入ったものであろう。4 は中期後半の屈曲口縁小型甕でⅠ区南最下層出土。5 は中期の屈曲口縁甕で、Ⅰ区下層出土。6、7 は中期初頭の壺である。後者は口径 18cm 前後とみられる。前者はⅢ区 SD001 出土、後者はⅠ区西の遺構面出土である。8 は中期前半の鋤先口縁甕で、Ⅰ区南最下層出土。9・10 は中期前半～中葉の鋤先口縁甕で、前者はⅢ区東部下層、後者はⅢ区下層下位出土である。11 は中期前半の鋤先口縁小型甕でⅡ区下層上位出土。12 は中期初頭の小型甕で、Ⅲ区下層下位出土。13 は中期前半の上げ底の甕底部でⅠ区出土。14 は中期中葉の甕底部でⅢ区南出土。15 は中期後半の壺または甕の底部で、Ⅰ区出土。16 は前期末の亀ノ甲式系甕口縁でやや大型品とみられる。Ⅲ区上層下位出土。17～19 は甕棺片である。17・18 は中期前半の汲田式で、Ⅰ区出土。19 は中期後半の胴部でⅢ区下層出土である。20 は弥生前期の如意形口縁甕でⅠ区南最下層出土。21～23 は弥生前期の刻目突帯文深鉢でⅠ区南最下層などから出土している。

Fig.12 の 24・25 は SD005 出土土器である。24 は弥生後期の直口広口壺で、口縁端部が内面に肥厚する。直立気味の短い頸部に口縁付近はやや袋状をなし、肩はあまり張らない。下層出土、取り上げ番号 R2。25 は混入の弥生中期初頭の甕である。

Fig.13 の 1 は土製品である。外側面は R2.75cm の弧をなす。雀居 4 次 C6 区包含層 8 層出土品 (406 集・Fig.133-1293) のような断面杏仁形となるのではなかろうか。赤褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。小銅鐸等の内型である可能性がある。

Fig.13 の 2 ~ 4 は石製品である。2 は滑石加工品であるが、用途不明。未成品であろうか。図中央上端のカーブは側面が研磨されており、いきている。Ⅲ区上層下位出土。3 は桂化木製の砥石か。I 区西の遺構面出土。4 は頁岩製の砥石で、Ⅲ区 SD001 上層下位出土。

遺構の時期について

36 次調査地点で検出した遺構で最も古いとみられるのが、SD005 で、出土した Fig.12-24 の壺より弥生後期であるが、下半部が遺存しておらず、細別時期は明確でない。SD001 c もこれに近い時期とみられる。

SD001 は下層下部から弥生後期後半～終末期の土器が出土しており（遺存の良いのは Fig.10-4、7 等）、また、SD005 に後出することから、SD001 a の掘削時期は弥生後期後半以降の可能性が高いと考えられる。SD001 から出土する弥生前期から中期の土器は小片が多く、大溝掘削時に先行遺構や近接集落域から混入したものであろう。

SD001 b については調査時に a の土器と b の土器を厳密に分別できていないという問題があるが、下層上位～上層下部の土器群に SD001 b 掘削時期を示すものが含まれると考えられる。Fig.8-1(近畿系直口広口壺)、8-2・3、10-2・3 (在地系壺)、9-1 (在地系大型甕)、9-9、11-1 (近畿 V 様式系甕) など、今回出土土器の中で遺存の良好な個体はおおむねこの層位からの出土であり、SD001 b の掘削から埋没開始時期を示す土器群と考えられる。その時期は古墳時代初頭（久住氏の II A 期段階）前後である。Fig.10-13 ~ 15 の庄内甕も小片ながらこの層位での出土であり、SD001 b の時期を示唆する。古墳時代前期前半以降の土器は多くない。布留式系土器も Fig.9-10・11 等小片が少量出土するのみである。古墳時代前期前半には概ね埋没しているとみられる。

SD002 は SD001 を切る溝である。出土遺物は小片ばかりで、遺構の時期を決め難い。調査区内の遺構検出面で古代とみられる須恵器甕片が出土しており、その時期と考えておきたい。

井尻B遺跡第36次調査における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

井尻B遺跡第36次調査において花粉分析（寄生虫卵分析を含む）を行い、植生・環境・農耕の復原を行った。花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料およびその性状

（1）試料

分析試料は、井尻B遺跡第36次調査II区北壁SD001から採取された以下に示す3点である。試料採取箇所は分析結果の模式層序図に示す。

試料① II区北壁SD001上層茶褐色土：古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む

試料② II区北壁SD001上層黒褐色土：古墳時代前期前半

試料③ II区北壁SD001下層暗灰色粗砂、シルト混：弥生終末期前後

（2）性状・材質

試料の粒度組成、有機物含有量を図1に示す。試料①は砂が主となるが淘汰は悪く、シルト・粘土もやや多い。試料②も同様に砂が主となるが淘汰は悪く、シルト・粘土もやや多い。試料①、試料②は淘汰が悪いため水流の影響を受けずに堆積したとみなされ、シルト・粘土がやや多いことから周囲からの土壤堆積物が堆積したとみなされる。試料③は粗粒砂にピークをもち、粗粒に偏る。シルト・粘土も含まれ、堆積後に風化や土壤生成作用による分解を受けたと考えられる。有機物含有量は試料①、試料②、試料③とも2%以下と極めて低い。微細植物遺体片では、暗褐色化した微細木片がやや多く、微細炭片は少なく、微細草本片は検出されない。微細木片は土壤生成作用なし風化による分解で生成され、強く受けとると草本片は分解する。以上から、試料①、試料②は周囲の土壤が堆積したか、堆積後に乾燥化し、土壤生成作用なし風化による分解を受け、草本片や花粉粒は分解されたとみなされる。試料③は水流による淘汰を受け粗粒砂を中心とするが、堆積後に土壤生成作用や風化を受けたと推定される。

3. 方法

花粉粒・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、リン酸三ナトリウム法を加え、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマ

ン氏液を加え1分間湯煎)を施す

6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

4. 結果

(1) 分類群

分析の結果、井戸B遺跡第36次調査II区北壁SD001の試料(堆積物)は、いずれも花粉密度が極めて低く、分離できない微細木片が多い。出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉7、シダ植物胞子2形態の計15である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、計数できた試料については傾向をみるために密度を図示した。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

スギ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、ハイノキ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科ーイラクサ科

[草本花粉]

イネ科、ソバ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位より花粉群集の特徴を記す。

1) 試料③ II区北壁SD001下層暗灰色粗砂、シルト混：弥生終末期前後

花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されなかった。わずかに樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科、草本花粉のイネ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属が認められた。

2) 試料② II区北壁SD001上層黒褐色土：古墳時代前期前半

花粉密度は低い。草本花粉のイネ科、ヨモギ属がやや多く、アブラナ科、タンポポ亜科が出現し、樹木花粉ではクリが出現する。

3) 試料① II区北壁SD001上層茶褐色土：古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む

花粉密度は低い。草本花粉のヨモギ属が最も多く、アブラナ科、イネ科、ソバ属、樹木花粉ではクリ、スギが出現する。

5. 推定される植生、環境、農耕

各試料とも花粉密度は低かったが、花粉生産量が極めて少なく散布性の低い虫媒花植物の花粉が検出されたことから、植生の復原を試みた。以下、下位より植生、環境、農耕の推定復原を行う。

1) 試料③ II区北壁SD001下層暗灰色粗砂、シルト混：弥生終末期前後

花粉はほとんど検出されず、水流の淘汰を受けた粗粒堆積物であり、花粉等の比重の軽い粒子は淘汰されほとんど堆積されなかつたとみなされる。微細木片がやや多く、堆積後に土壤生成作用ないし風化を受けたと推定される。わずかに検出されたクワ科ーイラクサ科、イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属は乾燥を好む草本がほとんどで、周囲はこれら乾燥を好む草本が分布し、乾燥した環境であった。

2) 試料② II区北壁SD001上層黒褐色土：古墳時代前期前半

イネ科、ヨモギ属がやや多く、アブラナ科、タンポポ亜科が出現することから、周囲にはこれらの草本が分布し、乾燥した環境が示唆される。イネ科とアブラナ科には雑穀や野菜が含まれ、これらが栽培された可能性がある。樹木では虫媒花植物のクリが検出され、近隣に分布していた。

3) 試料① II区北壁SD001上層茶褐色土：古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む

周囲にはヨモギ属が多く分布し、乾燥した環境が示唆される。アブラナ科、イネ科、ソバ属が生育していた。アブラナ科とイネ科には栽培植物が含まれ、ソバ属は明かな栽培植物であることから、周囲にソバ属の畑が分布し、アブラナ科植物、雑穀の栽培が行われていた可能性が示唆される。樹木では風媒花植物で乾燥を好む二次林種のクリが分布していた。

6. まとめ

井戸B遺跡第36次調査II区北壁SD001で花粉分析を行った結果、下位より弥生終末期前後（試料③下層暗灰色粗砂）の時期は、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科の草本が周辺に分布し乾燥した環境が推定された。古墳時代前期前半（試料②上層黒褐色土）では、周囲にヨモギ属とイネ科が多く分布し乾燥した環境が示唆され、雑穀やアブラナ科植物の栽培の可能性が推定された。古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む時期（試料①上層茶褐色土）では、ソバ属が検出され、周囲に畑の分布が示唆され、他にアブラナ科植物、雑穀の栽培の可能性が示唆された。周囲には乾燥を好み二次林種であるクリも生育していた。なお、試料となったSD001の各堆積物は、暗褐色化した微細木片がやや多く、土壤生成作用ないし風化を受けている。このことは遺跡がローム層上に分布し、比較的乾燥した環境下にあったことに起因すると考えられる。

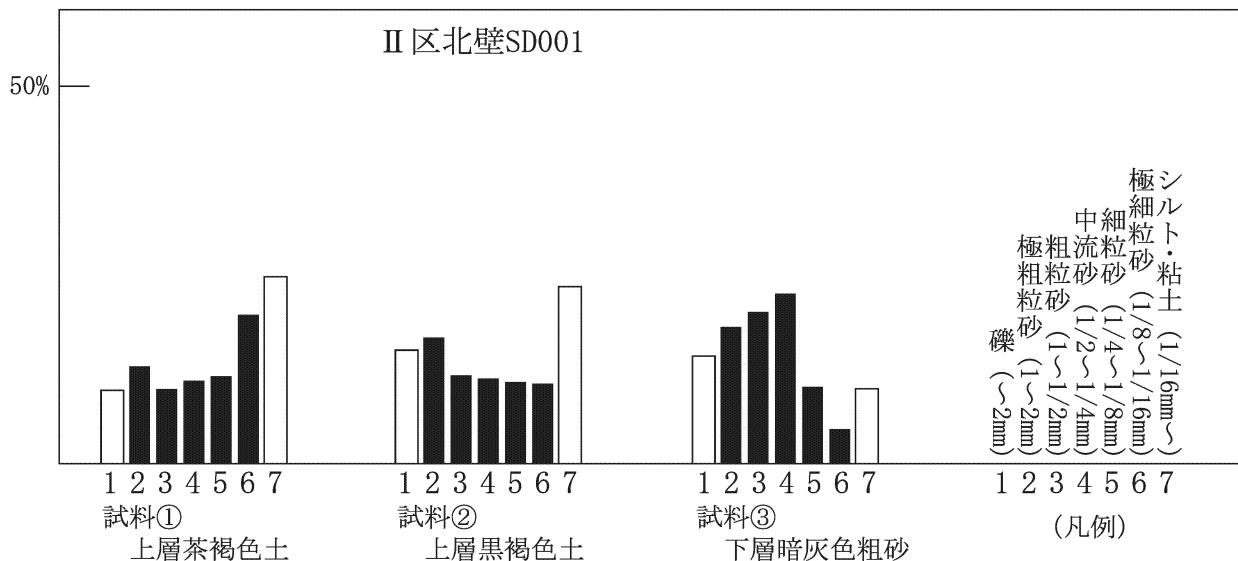
参考文献

- 中村純（1967）花粉分析. 古今書院, p.82-102.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 金原正明・金原正子（2013）植生と農耕における土壤層分析の実証的研究. 日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集, p.112-113.

表1 井尻B遺跡第36次発掘調査における花粉分析結果

学名	分類群 和名	SD001 II区北壁		
		①上層 茶褐色土	②上層 黒褐色土	③下層 粗砂
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	5	2	
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1		
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	1		
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	6	12	1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	2		
Cruciferae	アブラナ科	6	3	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科		3	1
Asteroideae	キク亜科			1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	23	13	1
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子			3
Trilate type spore	三条溝胞子	5		
Arboreal pollen	樹木花粉	10	3	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			1
Nonarboreal pollen	草本花粉	38	31	5
Total pollen	花粉総数	48	34	6
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度 $\times 10^2$	2.9 $\times 10^2$	2.1 $\times 10^2$	2.7 $\times 10$
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	3
Fern spore	シダ植物胞子	5	3	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal · wood fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)

(1) 粒度組成



(2) 有機遺体の含有量

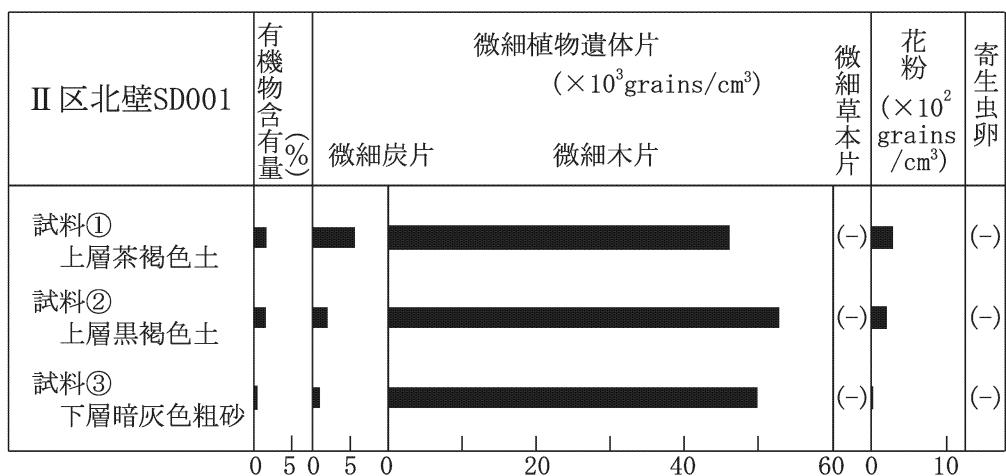


図1 井尻B遺跡第36次調査分析試料(堆積物)性状図

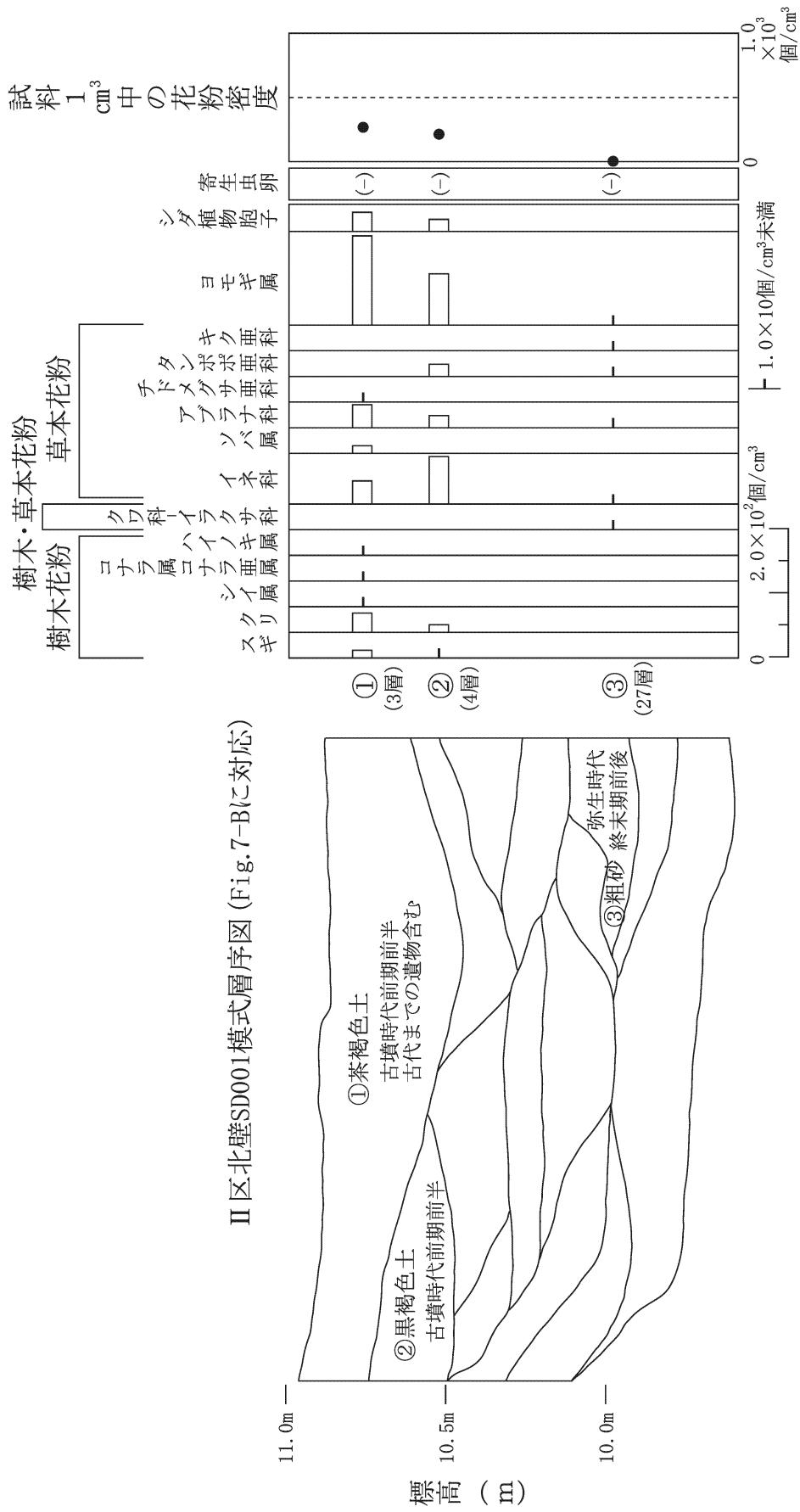
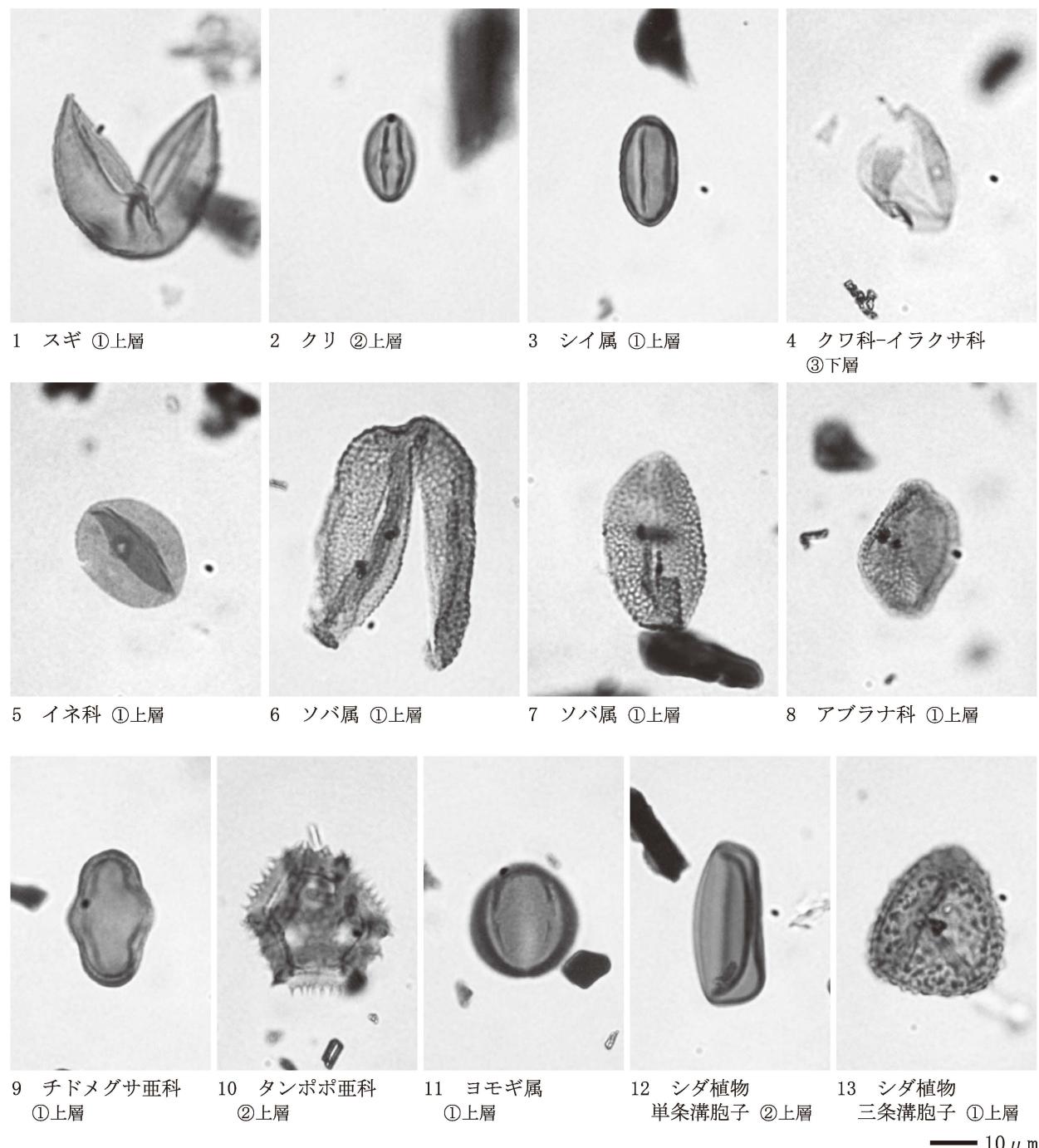


図2 井尻B遺跡第36次調査の花粉分析結果

井尻B遺跡第36次発掘調査の花粉・胞子

SD001 II区北壁



4. まとめ

第 36 次調査は、遺跡北西の台地縁辺部に立地しており、弥生時代後期から古墳時代前期の大溝等を検出した。北側の 17 次調査 F 区と近接しており、一連をなす遺構がみつかっている。

17 次 F 区 SD2005 は 36 次 SD001 と一連をなす大溝で、上層から韓国西部産とみられる陶質土器壺（古墳時代初頭から前期前半段階）が出土している。17 次 F 区 SD2018 は SD2005 の東側を切る遺構として報告されているが、本調査地点では切り合い等異なる解釈となつた。SD2018 は本報告の SD001c の延長とみられるが、SD001a～c の中では最も古い段階の掘削である可能性が高い。さらに SD2005 (SD001a・b) 溝掘り直しの土層解釈についても考え方を異にする。17 次 F 区 SD2006 は 7 世紀の溝として報告されているが、その延長上がり 36 次調査地点ではみつかっていない。SD2006 は直線溝ではなく、南に向かって東偏して、36 次調査範囲の東側を通るものなのであろうか。36 次 SD002 が同時期の溝とみられるが、調査区の北東部で東へ屈曲している。その延長は削平により消失しているのか、17 次 E 区でも検出されていない。また、17 次 F 区の報告書では遺構面のレベルが 7m 以下になっているが、原図では 8.4～9.2m 前後になっている。しかしこれも周辺の道路の標高からみて誤っており、さらに 1.5m 前後高く、実際の遺構面は 36 次より 40～50 cm 前後低い程度とみられる。

SD001～SD2005 は幅 6m 前後の大溝で長さ 48m 以上ある。台地の西縁辺を南から北に水が流れる水路と考えられる。直線的であるが、自然地形に沿ってやや東方へカーブしている。弥生後期の並列する小溝 (SD001c, SD005)→弥生後期後半～終末期の大溝 (SD001a, SD2005)→古墳時代初頭の再掘削 (SD001b)→古墳時代前期前半には水路としての役目を終えて概ね埋没という変遷が考えられる。SD001 覆土の花粉分析によれば、古墳時代前期前半の段階では乾燥を好む二次林種であるクリが生育し、畑作雑穀栽培（ソバ属、イネ科、アブラナ科植物）が行われていた可能性が指摘されている（第Ⅲ－3 章）。

同時期の「環濠集落」（西区今宿五郎江遺跡、西区野方中原遺跡、博多区雀居遺跡等）の環濠からは高密度で土器等が出土しているが、井戸 B 遺跡の大溝出土遺物は低密度で、略完形品の出土も多くない。出土遺物組成の差異は溝の機能の差異や廃棄の場としての意味づけの違いなどを示唆していると考えられる。SD001～SD2005 は土層堆積から水路として機能しており、機能時は井戸並みの地下水もあって、枯れにくい水量を保っていたものと考えられる。その用途には生活用水、灌漑用水、舟運路等が考えられ、「環濠」よりも日常生活レベルの機能を第一とする遺構とみられる。

出土遺物は弥生時代前期から古代に及ぶが、弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器を主体とする。「外来系土器」は多くないが、古墳時代初頭段階の近畿 V 様式系土器が一定量出土している。また、17 次 F 区では古墳時代前期の陶質土器が出土している。当該期の建物址が多くみつかっている 17 次 E 区以南の土器組成とも異なっており、今後、集落内の集団関係を詳細に検討するうえでの手がかりになるかもしれない。今後の課題としたい。



1. I 区全景 (SD001 上層掘削段階 北から)



2. I 区 SD001 周辺 (南から 北壁の土器は R1 と R2)



1. I 区 SD001 南壁土層断面



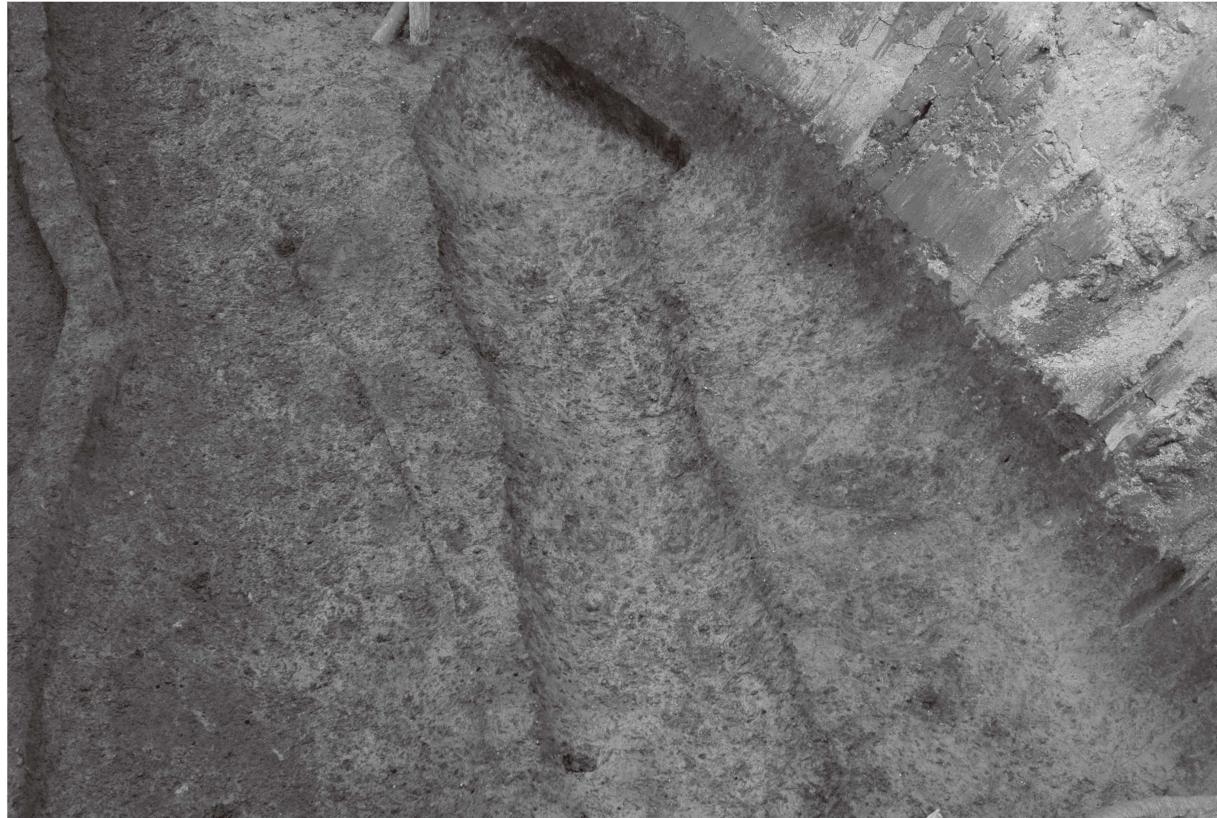
2. I 区 SD005 (北から)



1. II区作業風景（南から）



2. II区全景（南から）



1. II区 SD002 (南から)



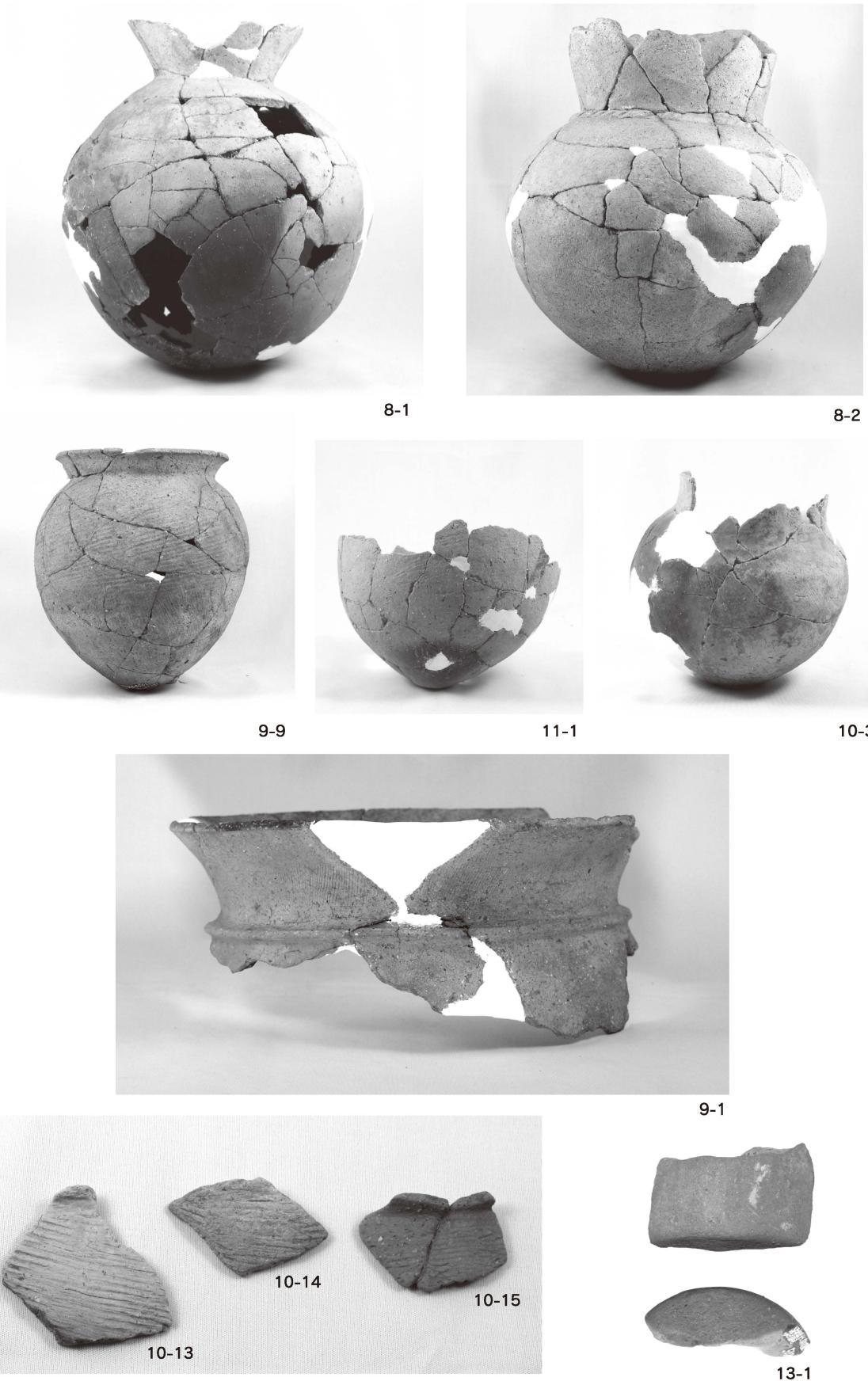
2. III区全景 (SD001 上層掘削段階 南から)



1. III区全景 (北から)



2. III区 SD001 (北から 土器は R4)



出土遺物（番号は挿図番号に対応）

報 告 書 抄 錄

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1217集

井尻B遺跡 22

—第36次調査の報告—

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 有限会社アートプロセス
福岡市南区高木2丁目8番7号